

## + 6 【さんりんさん】

完ちゃんを探すために、というより、まずは【まるのみおんな】にあうために、よく小山へ行きました。

何度目かのときに、山道を三輪車でくる人にあいました。

ふつうのおじさんで、野良仕事から帰る途中という雰囲気でした。

ところが、どうして自転車ではなく三輪車なのだろうと、よく見てみたら、三輪車に乗っているのではなく、下半身が三輪車なのです。

これはまさしくおばけです。

上半身が人間で下半身が馬とかなら絵本などで知っていたのですが、三輪車とは想像を絶（ぜっ）していました。

このぶんだと、いずれは自動車や飛行機のおばけもでてきそうな気がしました。

さすがの懐爺だって、これを見ればびっくりしないわけがないでしょう。

で、その三輪車おばけですが、

「ぼく【さんりんさん】、よろしくだよ」

と自己紹介してくれました。

しかも自分で「さん」付けするんですから、なかなか調子のいいおばけです。

とにかくよく喋るおばけで、ききもしないのに自分から喋る。

「ぼく【さんりんさん】、ぼく、わるいことしないおばけ。よろしくだよ。ぼくわるいことしない、それがわるいことだから、おばけ、よろしくだよ。ぼく【さんりんさん】、いわゆる近未来（きんみらい）おばけの、はしりっっていわれるだよ。これから、おばけにも高齢化（こうれいか）の波が押し寄せるから、ぼくみたいなおばけもでてくるだよ。これからの主流は【くるまいすさん】だよ。ぼく【さんりんさん】、わるいことしないだよ。だけど、でてくることそのものが、わるいことだよ。いちばんわるいのは、人間と三輪車のつながめが曖昧（あいまい）だってことだよ。だから、ちんちんはどこについているのかって、よくきかれるだよ。おばけに、ちんちんは要らないだよ。おばけはこどもなんかつukらないだよ。おばけはこの世界が、ろくでもないもんだってわかっているから、

こどもなんかつくらないだよ。もしこどもつくったって、人間にすぐに殺されるのがわかっているから、つくらないだよ。おぼけの世界も人口過多だよ。人口っていうのか、化口っていうんだらうな。いいや【さんりんさん】がいくつもいるわけじゃないだよ。【さんりんさん】はぼくだけだよ。種類が多いだよ。例えば、【がしゃどくろ】と【おにどくろ】にこどもができてごらん、【がしゃおにどくろ】だよ。そのこどもは【がしゃがしゃおにどくろ】だよ。そのまたこどもは【がしゃがしゃおにどくろ】だよ。収拾がつかないだよ。そらあ、おぼけの世界にだって、恋愛もあるだよ。みんなは〈変愛〉ってよんでいるだよ。でも、純情なものだよ。〈変愛〉しても性の営みなんかしないだよ。いつときの欲情でこどもつくって、不幸にさせるなんてことは、まともな人間じゃなければできないだよ。べらべらべらべら」

「おはなしちゅうすみませんがのう」

ぼくは丁重（ていちょう）にいました。

「ぼく【さんりんさん】、ぼく金ちゃんのこと、よく知っているだよ。金ちゃんはおぼけの世界では有名人だよ。いま【まるのみおんな】のおなかの中にいる完ちゃん、金ちゃん心配して小山までやってきていること、知っているだよ。でもぼく、わるいことしないおぼけ。完ちゃんの運命を変えたりしないだよ。完ちゃんの運命は最高の運命なんだよ。邪魔したりしないよ。金ちゃんもいくらさびしくても、ともだちの運命を左右する、権利なんてないんだよ。もちろんいまはわからないだよ。十年すればわかるだよ。何でもひとつのことをとことん知りたければ、十年かかるだよ。べらべらべらべら」

「おはなしんところ、すみませんがのう」

こんどは強くいました。

「ぼく【さんりんさん】、ぼくに何か」

「そのさんりんしゃ、のせてもらえんかのう」

虹色に輝いていて、とにかくきれいなのです。

これを見て、老若男女（ろうにやくなんによ）乗りたく無い人はいないでしょう。

「ぼく【さんりんさん】、だめよだめだめ。ということは、ぼくの上半身と下半身を、ひきはなすということだよ。それはさあ、【ひとつめこぞう】

の目玉を盗むのとおなじだよ。それはさあ、【ろくろっくびの】首を縛り付けるのとおなじだよ。それはさあ、【からかさおぼけ】のからかさをぶち破るのとおなじだよ。金ちゃんはおぼけよりも残酷（ざんこく）なひとだよ。べらべらべらべら」

「わしがざんこくかい。ならば、ひきはなすかのう」

ぼくは、【さんりんさん】の、腰のあたりのつなぎめに組み付きました。

「ひえひえ。殺されるだよ。助けてくれだよ」

【さんりんさん】は必死で山道を逃げていきます。

けれども何せ三輪車ですから、すぐに追い付きそうです。

「まてえまてえだよ」

ぼくは追いかけます。

「助けて助けてくれだよ」

「まてえまてえだよ」

「助けてお助けだよ」

せっかく追い付きそうになると、【さんりんさん】は急に方向転換をして、山道を超特急でかけおりて行きました。

さんりんりんりん  
べらべらべらべら  
ぼくさんりんさん  
りんりんさんさん  
ぼくさんりんさん  
にげろやにげろや  
べらべらべらべら  
ぼくさんりんさん

ぼくは諦めるよりほかはありませんでした。

それにしても、おそろしいほどおしゃべりなおぼけでした。

きっとおぼけの世界でも嫌がられて、しゃべる相手もいないで、ぼくの前であんなにしゃべったのだろうとおもわれました。